伝説のテクノロジー
Legendary technology
40

床山 床松さん

国技・大相撲の伝統と格式の象徴 大銀杏を結う

日本書紀に記述があるとされる相撲は、まさに日本の国技といえる。
その相撲人気を裏方として支えているのが、床山だ。
一昨年末、床山の頂点に立った床松さんもそのひとり。
大銀杏を結うその鮮やかな手さばきは、すでに名人芸の域に達している。

君は床山になった方がいい

1970年、当時16歳だった松井 博さんは、千葉県稲毛の自宅から電車に乗り、両国駅で下車した。すると駅前で相撲取りを見かけた。北海道にいた頃はわんぱく相撲に出場し、栃錦や若乃花の絵が描かれたメンコで遊んでいた相撲好き。何の気なしに相撲取りの後をついて行ったら春日野部屋にたどり着いた。

もともと「相撲取りになりたい」という気持ちはあった。しかも驚いたことに部屋から出てきたのは、元横綱栃錦の春日野親方ではないか。

「あのメンコの人だ」

感激した松井さんは思わずこう口にしていた。

「僕、お相撲さんになりたいんです」

それに対して春日野親方は「1年くらい部屋で遊んでいれば体はすぐ大きくなるよ」と言った。つまり、入門を認めたのである。

ところがそのとき親方の隣にいた人物が「君は床山になった方がいい」と言った。

床山というのが何のことか、松井さんは知らなかったが、思わずこう答えた。

「はい、よろしくお願いします」

こうして松井さんは春日野部屋に所属する床山になったのであった。

最高位の特等床山に昇格

力士の髷(まげ)を結う床山は、日本相撲協会に雇用される。だが、力士と同様、床山も相撲部屋に所属するのが習わしだ。そして力士の四股名(しこな)と同じように、床山にも独特の名前が付けられる。たいていの場合、床山の「床」の字に本名の1文字を加える。松井さんの名は春日野部屋に入った日から、床松となった。

相撲は番付社会。床山にも一番下の5等から最高位の特等まで6段階の階級がある。特等になれるのは、勤続45年以上で、特に優れていると評価された床山だけだ。特等床山は番付で言うと三役格で、移動のときはグリーン車に乗り、巡業先のホテルや食事も別格だ。

床松さんは2014年12月、１等床山から特等床山に昇格した。現在、特等床山は床松さんも含めて2人しかいない。文字通り、頂点を極めたのである。

その床松さんは駆け出しの頃、毎朝、春日野親方の整髪をした。親方はくせ毛なので、まずお湯を付けて髪を丹念に揉む。整髪といってもポマードをつけてオールバックにするだけだったが「栃錦の頭に触れるのはうれしかった」と床松さんは言う。

大銀杏を結うときに使う鬢付(びんつ)け油には、かつて松やにが使われていたこともある。場所中、支度部屋にはその鬢付け油の独特の香りが漂う。

相撲部屋で床山は力士たちと寝食を共にする。起床は朝の5時半頃。力士が稽古を終え、風呂から上がったら床山の仕事が始まる。といっても、大銀杏を結えるのは十両以上の関取だけ。それも本場所のときや公式の行事があるときなどに限られ、普段は関取も丁髷(ちょんまげ)である。

「入門したての頃は、何もしなくていいからただ先輩の仕事を見ていろと言われました。同じ頃に力士として入門した若い衆が3、4人いて、誰かひとりがミスをすると連帯責任で全員が怒られました。今は相撲界も暴力厳禁ですが、あの頃は手が出ることもありました。厳しくて悔し

本名：松井 博（まつい ひろし）1954年、北海道函館市生まれ。1970年、床山として春日野部屋に入門。部屋の力士の結髪を務める。2014年12月24日付で1等床山から特等床山に昇格した。「髷を結っていると、その力士の調子がだいたい分かります」と言う。

床山の道具。写真上から水付けに載った①前掻き、②揃い櫛、③髷棒、④荒櫛、⑤すき油、⑥先縛り、⑦すき櫛、⑧握り鋏。

髷を結うには、くせ直しといって、まず、髪に水をまんべんなく付け、よく揉んでいく。

髷は精神を集中させることと、頭の保護という目的がある。その大切な役割を全身全霊で床松さんは担っている。

元結で結ばれた部分の少し先を先縛りで縛り、しっかりと折り曲げ髷の先を広げてから銀杏の葉の形にしていく。

くて、泣いたこともありました」

黄楊の櫛を何本折ったことか

悔しい思いをしないですむようにするためには、腕を磨き、番付を上げていくしかない。若い頃の床松さんは暇そうにしている幕下以下の力士を見つけては声を掛け、大銀杏を結う練習をさせてもらった。

「髷を結うときには黄楊の櫛を使います。まっすぐに引けばいいのですが、髪にくせがあってひっかかったりすると、変なところに力が入り櫛の歯が折れてしまいます。黄楊の櫛は今だと1本10万円くらい。私が若い頃でも5万円くらいしましたが、何本も折りましたね。髷を銀杏の形に広げるときは髷棒を使いますが、うっかりそれをお相撲さんの頭に刺して、血が出たこともありました」

そうした努力を重ね、本場所の土俵に立つ関取の大銀杏をようやく結えるようになったのは、入門から10年ほどたった頃のことだった。

「初めて大銀杏を結ったのは栃勇という力士でした。今でもよく覚えています。うれしかったですね」

力士の髪質や頭の形は一人ひとり違う。それぞれに合った大銀杏を結うのが、床山の腕の見せ所だ。

大銀杏を結っている間、力士はその日の取り組みの作戦などを考えたりしている。ダラダラしていたら力士も集中できない。結髪はスピードも大事だ。床松さんの場合、だいたい20分ほどで大銀杏を結い上げる。

「床松さんは早い」

同じ春日野部屋の関取、栃ノ心（12ページ右下写真）がそう証言する。

そろえた髪を縛るときには、和紙に蠟を塗った元結を口にくわえ、歯をぐっと噛みしめながら強く縛り上げる。ここがしっかりしていないと、大銀杏がすぐ崩れてしまう。結髪を始めると、見る見るうちに床松さんの額から汗が噴き出してきた。手先の器用さや繊細さ、センスなどを要求されながら、なおかつ力仕事でもあるのだ。

「長い間やってきたから、もう歯はガタガタです」

そうして結い上げても、相撲の取り組みはせいぜい数十秒で終わるのが通例。立ち合いで変化をしたりすれば1、2秒で勝負がつく場合も珍しくない。それでも、見ている人は見ている。

「髷を結った関取衆が番付の上にあがったときは、やっぱりうれしいな」と目を細めて床松さんは言う。

「なんだ、あの髷は。誰がやったんだ」

本場所のとき、そういって叱責する人がいる。故 北の湖理事長もそのひとり。大銀杏は、連綿と続く相撲界の歴史や伝統、格式、そして様式美を象徴するものでもあるのだ。

断髪式でも鋏を入れないこだわり

一方、力士にとって大銀杏は出世のシンボルでもある。1日でも早く十両に上がり、大銀杏を結えるようになることは、すべての力士の目標だ。けれども現実には十両に上がれぬまま土俵を下りる力士も多い。春日野部屋の場合、そうした力士が辞めるときには特別に大銀杏を結い、部屋の土俵で断髪式をする。最後の止め鋏を入れるのは親方だ。

「でも、私は鋏を入れません。床山の仕事は髷を切ることではなく、結うことですから。そこは私のこだわりです」

大相撲の番付には、力士の名前だけでなく行事や呼び出しの名も記載されている。しかしかつては床山の名だけ番付に載っていなかった。それでは若い床山の励みにならないということで、10年ほど前から特等と1等に限って床山の名も番付に載るようになった。

昨年の10月21日、大相撲の地方巡業が愛媛県今治市で開かれた。地方巡業では本場所と違い、土俵上での稽古が披露されたり、初っ切りが行われたりする。この日は「髪結い実演」も行われ、床松さんが土俵に上がり大勢の観客の前で栃煌山の大銀杏を結い上げて見せた。裏方の床山が表舞台に出てくるのはあまりないこと。観客もめったに見られない場面を興味深そうに見つめていた。

見事な大銀杏を結い上げ、観客の拍手を浴びながら土俵を下りるとき、床松さんは誇らしげに手を高く上げて声援にこたえた。

「地方巡業のときは、他の部屋の若い床山が私の結髪を見に来ることもあります。逆に私が若い床山の仕事を見てアドバイスすることもありますよ。今は一門ごとに床山が集まって、一緒に勉強会を開いたりもしています」

床山は65歳が定年。頂点を極めた床松さんの技を見られるのも、あと3年を残すのみである。